

## 巻頭言

著者	木原 民雄
雑誌名	デジタルハリウッド大学紀要
巻	7
号	1
ページ	1 -1
発行年	2020-11-26
URL	<a href="http://doi.org/10.34482/00000006">http://doi.org/10.34482/00000006</a>



デジタルハリウッド大学の研究紀要『DHU JOURNAL Vol.07 2020』をお届けする。この研究紀要は、デジタルコンテンツ領域を中心とした様々な学術的課題に対して、理論と実務を架橋する高度な研究活動の発表の場として発刊され、7年目となる。

最近、論文を書きしてみたいと言われることが多くなった。論文を書かなくても死ぬことはないが、論文を書くとともに良いことがある。論文は依然として世界の最前線と容易に繋がることのできる仕組みであり、書きさえすれば会ったこともないどこかのひとに読んでもらえる暗闇への跳躍の仕掛けでもある。死んでも国立国会図書館には残る。

本学ではコンテンツをつくることやビジネスを立ち上げることに力を入れてきた経緯があるが、日々の活動のなかで、論文という形で表現して何かを残すことの必要性を感じ、書いてみたい気持ち、あるいは書かざるを得ない気持ちになる関係者が増えてきていることを実感する。私たちはもはや一時の快楽や満足だけでは生きていけない。歴史の流れのなかで、どこかで誰かと繋がっていかなくてはならないのである。

実はここ数年、私自身、論文を書くということはどういうことなのかについての論文をいくつか書いている。良い論文とはどういうものなのか、研究者にはさまざまな思いがあることを調査してきた。昨年からの研究紀要の編集幹事となったが、本学らしい勢いのある研究論文が自然と集まってきて、筆者の誰もが良い論文を書こうとしていることに萌えざるを得ない。うれしい限りであり、論文を書くとはどういうことなのか、あらためて見つけ直す有益な機会となっている。

今回は、予め編集方針として、これまでの研究教育活動の成果をまとめた「これまでのまとめ」と、他では受け入れられにくいような先端的で萌芽的なテーマを論考した「未来への挑戦」とを、主なふたつのテーマとして掲げ、投稿を募った。激動の世界のなか、教員と職員、大学院を修了した研究員、現役の大学院生から、バランスよく研究成果を集めることができた。特に、株式会社立である本学の特色のひとつに教員と職員の協働があり、教育や入試や研修に関わる研究成果については、引き続き充実したものとなった。

また、編集規定を改定して投稿種別を簡素にし、より研究内容に寄り添った編集をすることにした。外部の方々に査読のご協力をいただき、メタ査読の仕組みにより、必要に応じて再査読も行って質の向上に努めた。

これをご覧の方々には、本学関係者として、あるいは共同研究者や協力支援者として、次号への投稿をお待ちしている。なにしろ良い論文は、書くことも楽しいのである。

編集幹事 Chief Editor

**木原 民雄** KIHARA Tamio

デジタルハリウッド大学/大学院 教授  
Digital Hollywood University, Professor